

未来ノート

-202Xの君へ-

サッカー

浅野拓磨

7人きょうだい

チャレンジ精神

ライバルと自分

いつだって前へ

自分のことは自分でやる

三重県の山あいにある菰野町で、浅野家の三男として拓磨(23)は生まれた。2人の兄の後を追いつき、サッカーボールを蹴り始めた。きょうだい7人で、上から6人は男。みなサッカーに打ちこみ、中学卒業まで同じクラブ、部活動に入



二年生の時
このレプリカは、サッカーの浅野拓磨選手が着用していたもの。拓磨選手は、このレプリカを着用して、四日市中央工2年時には全国選手権大会で準優勝。自身(左、⑬)は得点王に



父智之さん(52)、母都姉さん(52)は、拓磨選手(左)の兄からのおさがりだった。母の都姉さん提供。⑭四日市中央工2年時には全国選手権大会で準優勝。自身(左、⑬)は得点王に

⑬小学校2年のころの拓磨。シャーシーなどは兄からのおさがりだった。母の都姉さん提供。⑭四日市中央工2年時には全国選手権大会で準優勝。自身(左、⑬)は得点王に

子(52)の教えは「自分のことは自分でやる」。食事は食べられる分だけ米をよそい、大鍋・大皿からおかずを取る決まりだ。朝食坊すれば、朝食が残っていない。自分で起きて、布団をあける。生活習慣は自然と身についた。

大家族の三男という立ち位置で、拓磨は観察力を育んだ。兄や弟が何をしたら、両親に怒られ、ほめられるか。「いい意味で人の顔色を見て。自分はこうすればいいんだ、と」

両親の留守中に、まだ赤ん坊だった弟のオムツを前後逆さまにつけたことがあった。それでも都姉さんが「よく手伝ってくれたね」と喜んでくれたのが、うれしかった。学校やクラブでも、先生やコーチが何を求めているかを感じ取った。「大人にほめられ、喜んでもらえる、それを続けるようになる」

小学校高学年で拓磨が県選抜に入ったとき、都姉さんは「サッカーに限らず、すべてのことでみんなの手本になるように」と声をかけた。一流の選手は人としても立派との考えだ。拓磨は「小さな頃に言われたことは、素直に受け入れられて今も残る」と言う。

厳しいプロの世界で生き抜く競争意識、自立の精神の原点が、大家族にある。「今の僕があるのは、この家族だったから。きょうだいが多くて親は大変だっただろうけど、僕にはプラスしかなかった」。いつもそう語っている。(藤木健)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。